



Title	百舌鳥古墳群出土の家形埴輪について
Author(s)	橘, 泉
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 309-318
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

百舌鳥古墳群出土の家形埴輪について

橘 泉

百舌鳥古墳群は堺市堺区・北区・西区・中区に広がる古墳群である。日本最大の古墳・仁徳天皇陵古墳をはじめ、現在は44基の古墳が残っている。百舌鳥古墳群内の古墳の埋葬施設や副葬品は不明な点が多いものの、周囲の調査が進み、埴輪の出土は多く確認されている。本論では、百舌鳥古墳群内で出土している家形埴輪について屋根や壁構造による家形埴輪の分類、古墳規模や配置場所との関係に重点をおいて検討することで、5世紀の大王墓群での家形埴輪の性格について検討したい。

1. 研究史

家形埴輪の研究は、形態、製作技法、墳丘上での配置や組み合わせ、モデルとなった実際の建物についての推定など多岐にわたるが、本論で中心となる屋根・壁構造や古墳規模との関係についての研究史を概観したい。

赤堀茶臼山古墳での発掘事例から家形埴輪について考察を行った後藤守一は、(規模の大きな古墳については)複数の家形埴輪が正殿・舎屋・倉庫と一連の屋敷を表していること、神社の屋根は切妻造だが家形埴輪には切妻造と四注造があることなどを示した(後藤1931)。石野博信は家形埴輪の壁と柱構造(真壁建物、大壁建物)に着目し、地域的な分布と変遷の検討をおこなった(石野1994)。また稲村繁は、家形埴輪を屋根構造(切妻造、寄棟造、入母屋造)と壁の入口・窓表現から考えられる建物の機能(祭殿形、住居形、倉庫形)で分類を行い、その変遷を示した(稲村2000)。一方、高橋克壽は家形埴輪そのものに目を向け、その形式差の基礎的な検討を通じて特定の性格があるのかどうかを確認すべきだとした。高橋は寄棟造に注目し、古墳時代前期から中期では限定的で特別な存在であり、被葬者の霊の依代として選ばれた可能性が高いことを論じた(高橋2017)。

家形埴輪の墳丘上での配置場所については、後藤守一の赤堀茶臼山古墳での配置復元や、豪族居館などの実際の遺構と対照させた検討のほか、形象埴輪の配置場所の変遷を考えるなかでも取り上げられてきた。小浜成は埴輪や共献土器で表現される古墳上での儀礼について、墳頂・造出・堤の「三大祭祀場」を中心にその変遷過程や内容などを検討した(小浜2008)。また、高橋克壽は家形埴輪が特に古墳時代前半には形象埴輪の中でも重要な存在であり、墳頂に置かれる意味、王権との関わりなどについて述べている(高橋2008)。

2. 百舌鳥古墳群出土の家形埴輪

百舌鳥古墳群内では18基の古墳で家形埴輪が出土している(表1)。限られた部位しか出土しない場合がほとんどであり、全体像が復元できるものは少ないが、いくつか特徴的な資料を紹介したい⁽⁴⁾。

御廟山古墳(前方後円墳 墳丘長 203 m) 平成20年の調査時に、造出と前方部側面がぶつかる屈曲部分から家形埴輪と大型の圀形埴輪が出土している。

家形埴輪は身舎部分の長辺約22cm、短辺約16cmで切妻屋根の建物を表現する。四面全てに方形スカシが見られる、開放的な建物である。屋根には豎魚木がのり、千木が表現され、押縁が線刻される。

圀形埴輪は長辺約90cm、短辺約55cmで鉤状となる。入口上部にのみ鋸歯表現があり、扉は開閉できる構造となっている。各角部分および長辺の中間に円柱が用いられる。壁には裾廻突帯および線刻が2条入る。

なお、御廟山古墳では他にも別個体と考えられる圀形埴輪の鋸歯部分や豎魚木、造出汀付近で寄棟か入母屋造の屋根部分(昭和22年採集)、造出付近の濠内で切妻屋根や網代表現のある屋根、壁、豎魚木、後円部側二重濠で豎魚木などが見つかっており、複数個体の圀形埴輪、家形埴輪があったことが推定される。

寺山南山古墳(方墳 長辺 44.7 m、短辺 39.2 m) 長辺部分に造出がある。墳丘周囲には濠がめぐっていたと考えられ、一部履中天皇陵古墳の外濠と共有すると推定される。寺山南山古墳では少なくとも2点の家形埴輪が確認できる。

1点目は圀形埴輪とセットになる。圀形埴輪は長辺約38cm、短辺約33cm、長方形を呈し、上部に鋸歯表現はみられない。入口部分は方形スカシが開けられる。壁上部には2条の突帯が貼りつけられるが、裾廻突帯はみられない。家形埴輪は、身舎部分が平側約24cm、妻側約18cmの切妻屋根のものである、四面全てに方形スカシが入り、うち一面にはスカシ下部に割り込みがあり他三面よりもスカシが下側まで伸びるため、入口と考えられる。屋根には豎魚木・千木の表現はなく、線刻も見られない。

2点目は、切妻屋根の家形埴輪である。身舎の平側は約20cm、妻側は約14cmとなる。平側には押縁の線刻があり、妻側には梁・束・柱の線刻がある。豎魚木・千木の有無は不明。

七観山古墳(円墳 直径 56 m) 履中天皇陵古墳のそばでほぼ同時期に築造されていることから、履中天皇陵古墳の陪塚と考えられる。家形埴輪は7個体が確認されている。屋根形状が推定できるものは、切妻造1個体、入母屋造3個体である。切妻造の個体は、裾廻突帯に線刻を持つほか、屋根には鰭・破風板を有する。入母屋造の個体については、鰭・破風板を有し、屋

表 1 百舌鳥古墳群出土家形埴輪

[illegible]

根には網代が表現されるが、裾廻突帯の線刻などはみられない。

履中天皇陵古墳（前方後円墳 墳丘長 365 m） 百舌鳥古墳群内で2番目、日本でも3番目の大きさを誇る前方後円墳である。百舌鳥古墳群内の巨大墓で最も早い時期に築造されたと考えられている。前方部の円丘付近から大型の豎魚木と梯子のほか、屋根、破風板が見つかった。豎魚木には2本1組の平行線が2組線刻される。屋根には網代文が線刻されているものや、円柱状の剥離がみられるものがある。梯子は奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡に表現されているように、実際の建物などで使用されていたとみられるものの、埴輪での類例は少ない。梯子の存在から履中天皇陵古墳には高床式の建物の埴輪があった可能性が考えられる。

鳶塚古墳（円墳 直径 21 m） 3mほどの濠が周囲にめぐり、濠底から家形埴輪の破片が2点分見つかっており、墳丘上に立てられていたと考えられる。切妻造の個体1点と、寄棟造か入母屋造の個体1点がある。切妻造のものは、身舎部分で平側約33cm、妻側約25cm、屋根は復元にはなるが幅50cm以上、奥行40cm以上になる大型で、屋根には線刻が見られないが、妻側の壁に梁と柱の表現が見られる。寄棟造か入母屋造と考えられるものについては、高床構造になると考えられる。鰭などはみつかっておらず、屋根にも線刻は見られない。

百舌鳥梅町窯跡 百舌鳥古墳群内では、古墳群に供給された埴輪の生産場所がほとんど分かっていない。埴輪窯と考えられる遺構は、御廟山古墳近くの百舌鳥梅町窯跡と、仁徳天皇陵古墳西側の舳松村字南高田遺跡である。百舌鳥梅町窯跡では、窖窯状の遺構と犬形埴輪・家形埴輪・人物埴輪（女子頭部）・円筒埴輪などが出土している。見つかった家形埴輪は、寄棟造で妻側に角柱と2面の窓が表現されている。

百舌鳥梅町遺跡 百舌鳥梅町窯跡を含む遺跡である。中近世の井戸や溝などが見つかった。平成30(2018)年に行われた堺市立百舌鳥小学校の校舎改築工事にもなう発掘調査において、6世紀の2次堆積層から大型の家形埴輪が見つかった。切妻造の家形埴輪の妻側で屋根上部に豎魚木を乗せたと考えられる痕跡が残る。妻中央に突帯で立体的に棟持柱を表現する。屋根すぐ下に長方形のスカシが突帯をはさんで2つみられる。

3. 百舌鳥古墳群の家形埴輪の特徴

屋根構造 百舌鳥古墳群出土の家形埴輪の屋根構造は切妻・入母屋および寄棟と考えられる個体がある。切妻造と入母屋造がほとんどであり、寄棟造の可能性のある個体が含まれるのは、履中天皇陵古墳、大塚山古墳、御廟山古墳、鳶塚古墳、城ノ山古墳、ニサンザイ古墳、定の山古墳である。確実に寄棟造となる資料は大塚山古墳、百舌鳥梅町窯跡のものしかなく、切妻・入母屋に比べて割合が低くなることは推定される。

なお、百舌鳥梅町窯跡の寄棟造の個体は、屋根途中（半ばあたりか）に平帯を表現し、その

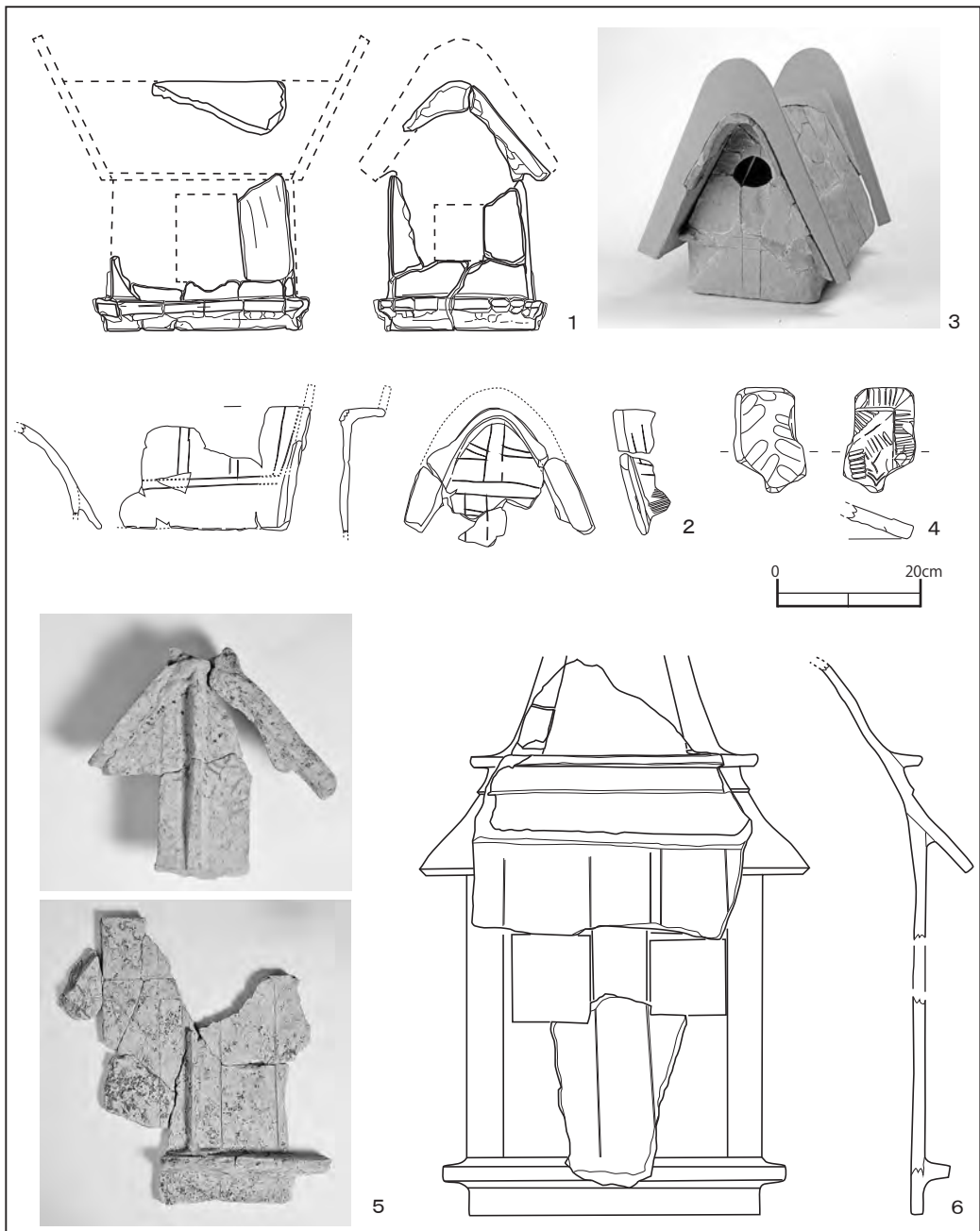


図1 百舌鳥古墳群出土家形埴輪 (1・2 寺山南山古墳 (堺市 2018) 3 鷺塚古墳
4 定の山古墳 (堺市 2019) 5 百舌鳥梅町遺跡 (堺市 2020) 6 百舌鳥梅町窯跡 (堺市 1999))

直上に突出度の高い方形の突帯を貼り付ける。押縁表現などの平帯は他古墳出土例でも見られるものの、突帯の貼り付けは類例が多くはなく、押縁表現に伴うものとは考えにくい。群馬県赤堀茶臼山古墳の寄棟造家形埴輪には、平帯表現はないが突帯は貼り付けられており、屋根表

現は類似する可能性がある。赤堀茶臼山古墳は切妻家6棟、高床の寄棟造家1棟と寄棟造家の限定性・特殊性が考えられるものである。百舌鳥梅町窯跡の寄棟造は壁部分に突帯はなく平地式と考えられるものの、特殊な建物を表現した可能性が高い。なお、百舌鳥梅町窯跡では、この家形埴輪の他に、人物埴輪（女性頭部）⁽²⁾と犬形埴輪が出土している。どの古墳に供給される予定だったのかは不明であるが、百舌鳥古墳群内で人物埴輪や寄棟造家形埴輪を樹立しようとした古墳があったと推定される。

壁構造 百舌鳥古墳群出土の壁構造が分かる個体は、御廟山古墳1、寺山南山古墳2、鳶塚古墳2である。御廟山古墳と寺山南山古墳の1体は、圀形埴輪とともに出土している。どちらも四面開放であり稲村の分類による祭殿形にあたる。御廟山古墳例では妻側に梁や柱を線刻で表現するが、寺山南山古墳例は妻側上部が欠損しており不明である。寺山南山古墳の圀形埴輪を伴わない個体には、梁と柱の線刻が見られる。いずれにも升束の表現は見られない。一方、百舌鳥梅町遺跡出土の家形埴輪は、妻側柱を突帯の貼り付けで立体的に表現している。この家形埴輪に関しては、残存高62cmと大型であることが推定される。屋根には豎魚木が乗っていた痕跡もみられ、特別な建物であったと考えられる。

墳丘規模と出土場所 百舌鳥古墳群では、履中天皇陵古墳や大塚山古墳、御廟山古墳などの大型の前方後円墳で、大型の家形埴輪（圀形埴輪）が出土しているが、鳶塚古墳や七観山古墳、寺山南山古墳といった小規模な円墳・方墳でも特徴的な家形埴輪が出土している。特に鳶塚古墳は21mの円墳であるが、高床建物を含む大型の家形埴輪が2個体見つかっており、築造当時の墳丘上では、かなり目立つ存在であったのではないかと考えられる。七観山古墳についても、家形埴輪7個体に加え、靱・盾・甲冑・蓋・壺など多様な形象埴輪が見つかっており、墳頂に置かれていたのだとすれば、墳頂面積に占める形象埴輪の割合は高かったのではないかと考えられる。

出土場所については、造出（くびれ部）・周濠・墳頂がほとんどである。寺山南山古墳の圀形埴輪とセットになる家形埴輪は造出付近ではあるものの、テラス上の円筒埴輪列の内側に置かれていた。また、履中天皇陵古墳出土例は前方部の円丘上という特殊な場所での出土である。履中天皇陵古墳では同じ場所から、大型の靱形埴輪も出土しており、家形埴輪も含め、大型の形象埴輪を並べていたと推定される⁽³⁾。

4. ま と め

百舌鳥古墳群は主に4世紀後半から6世紀初めにかけて築造された古墳の集合体であるが、5世紀前半頃までは切妻造や入母屋造が主体で寄棟造の割合は高くなく、5世紀後半になると寄棟造の可能性があるものが散見されるようになる。ただし、5世紀前半でも大塚山古墳で大

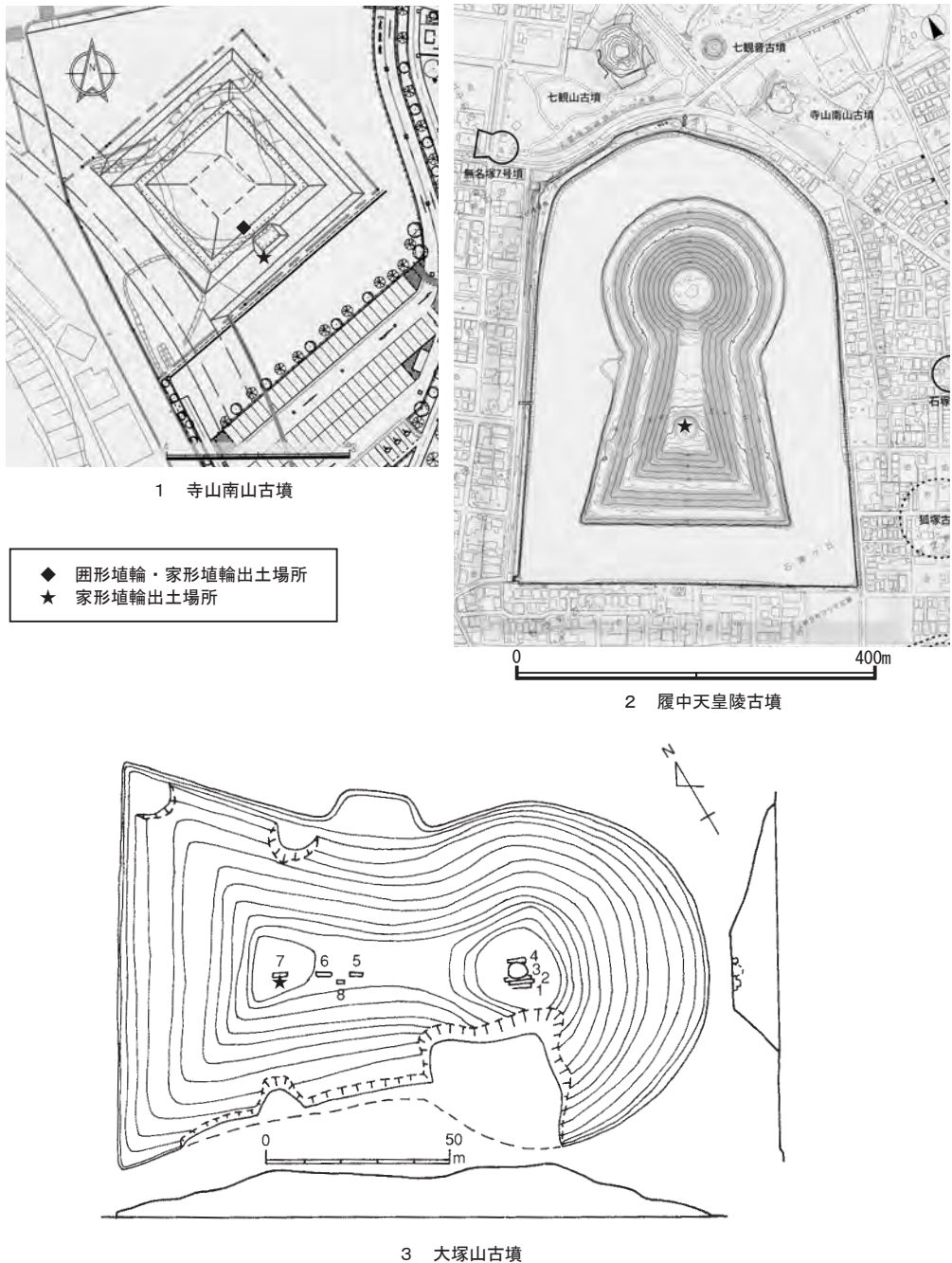


図2 家形埴輪出土場所

型の寄棟造家形埴輪が存在するなど、少数ではあるが特殊なものであったことが推定される。

また、百舌鳥古墳群出土の家形埴輪には、鰭や裾廻突帯の線刻などの装飾性の高い部材を持つ家形埴輪が少ない。大型古墳での出土事例が少ないことも原因の一つと考えられるが、検討

を要する部分である。

壁構造をみると、事例が2点と少ないものの、御廟山古墳と寺山南山古墳出土事例から、圀形埴輪に収められる家形埴輪が四面開放の稲村分類による祭殿形の構造であることが指摘できる。寺山南山古墳では、入口と窓を1か所ずつしか開けず他面が壁となる稲村分類による住居形のものも出土しているが、こちらは圀形埴輪を伴わない。圀形埴輪とセットとなる家形埴輪が意図的に選択されたものと推定できる⁽⁴⁾。

墳丘規模については、一概に古墳の規模と家形埴輪の大きさや種類、数が相関するものではないことが考えられる。また、出土場所については、墳頂・造出が多いが、周濠から出土しているものに関しては堤に樹立されていた可能性も考えられる。

以上、百舌鳥古墳群内で出土している家形埴輪を概観した。本来は、同時期の築造であり良好な埴輪を多数有する古市古墳群との比較や、時期を前後する大王墓群との比較検討をする必要があるが、力不足により及ばなかった。百舌鳥古墳群の埴輪については、家形埴輪以外にも出土事例が増えてきており、古墳群内の形象埴輪の様相、他地域の古墳群との比較が進められるようになってきた。大型古墳を有する古墳群の形象埴輪の変遷や意義について検討していくことを今後の課題としたい。

1 回生の夏、研究室の調査に参加した際に宿舎にあった埴輪の本が、家形埴輪や器財埴輪との出会いでした。卒論のテーマを家形埴輪にしようかなと迷っているとき、埴輪は製作者のクセもあり、家形埴輪は全体像が不明な場合も多いので難しいのではないかとアドバイスをいただき、当時は家形埴輪ではない埴輪を選びました。今回は学生時に断念した家形埴輪に挑戦しようと思ったのですが、全体像の復元やパーツの同定が難しく、力不足と資料を見る目の鍛え不足を実感しました。ただ、在学中のような資料を見る楽しさも同時に思い出すことができたので、もう少し、家形埴輪をはじめとした形象埴輪で古墳時代像に迫れるか、粘ってみようかと思います。学生時から本当にお世話になりました。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

註

- (1) 堺市内では上野芝駅前遺跡など家形埴輪が出土する遺跡が散見されるが、古墳等との明確な関係が検討しづらいため、本論では取り扱わない。
- (2) 百舌鳥梅町窯跡から出土した人物埴輪は、仁徳天皇陵古墳出土の人物埴輪（女性頭部）と大きさや表現が類似していると指摘されている。
- (3) 前方部に家形埴輪を置く例は三重県の宝塚1号墳（5世紀初頭）にも類例が求められるが、異例なものである（塩谷2014）。
- (4) 寺山南山古墳出土の圀形埴輪と家形埴輪のセットは、据えられた状態がよく分かる状況で出土

した。家形埴輪が四面開放であるにも関わらず、圀形埴輪の入口からは家形埴輪の中が見えないようになり、祭祀的な様相を示す建物と、それを囲う施設の特殊な関係性が垣間見える。

引用・参考文献

- 石野博信 1994「家形埴輪の壁—古墳時代における真壁建物と大壁建物の変遷と地域性—」『橿原考古学研究所論集』第11 吉川弘文館、東京：pp. 315-327
- 泉 眞奈 2022「家・圀・柵形埴輪」『埴輪の分類と編年 埴輪検討会シンポジウム 2022 資料集』埴輪検討会、大阪：pp. 73-99
- 稲村 繁 2000「家形埴輪論」『埴輪研究会誌』第4号 埴輪研究会、千葉：pp. 1-30
- 小笠原好彦 2004「家形埴輪に関する三つの問題」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会、広島：pp. 527-540
- 宮内庁書陵部 1995『書陵部紀要』第46号、東京
- 宮内庁書陵部 2006『書陵部紀要』第57号、東京
- 宮内庁書陵部 2013『書陵部紀要』第64号、東京
- 後藤守一 1931「上古時代の家」『史潮』第2号 大塚史學會、東京：pp. 121-150
- 小浜 成 2008「古墳における儀礼の場の変遷過程と倭王権」『埴輪群像の考古学』青木書店、東京：pp. 171-198
- 堺市教育委員会 1971『平井塚古墳（跡）発掘調査概報』、大阪
- 堺市教育委員会 1973『堺市文化財調査報告第1集 こうじ山古墳（跡）調査報告書』、大阪
- 堺市教育委員会 1988『国庫補助事業発掘調査報告書 昭和62年度 御廟表塚古墳一周濠跡東南隅地点一』、大阪
- 堺市教育委員会 1994『堺市文化財調査概要報告』第42冊、大阪
- 堺市教育委員会 1994『堺市文化財調査概要報告』第44冊、大阪
- 堺市教育委員会 1996『堺市文化財調査概要報告』第57冊、大阪
- 堺市教育委員会 1998『国庫補助事業発掘調査報告書 平成9年度 百舌鳥古墳群鎮守山塚古墳』、大阪
- 堺市教育委員会 1999『堺市文化財調査概要報告第81冊 平成9年度市内遺跡立会調査概要報告』、大阪
- 堺市教育委員会 2009『百舌鳥古墳群の調査』2、大阪
- 堺市教育委員会 2011『百舌鳥古墳群の調査』4、大阪
- 堺市教育委員会 2011『百舌鳥古墳群の調査5 御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書』、大阪
- 堺市教育委員会 2012『百舌鳥古墳群の調査』6、大阪
- 堺市教育委員会 2015『百舌鳥古墳群の調査』8、大阪
- 堺市教育委員会 2016『百舌鳥古墳群の調査9 長山古墳発掘調査報告書』、大阪
- 堺市教育委員会 2018『百舌鳥古墳群の調査11 ニサンザイ古墳発掘調査報告書』、大阪
- 堺市教育委員会 2018『百舌鳥古墳群の調査12 寺山南山古墳（TYM-5）発掘調査報告書』、大阪

- 堺市教育委員会 2019『百舌鳥古墳群の調査 13 定の山古墳 (JNY-5) 発掘調査報告書』、大阪
- 堺市教育委員会 2020『堺市埋蔵文化財調査概要報告第 172 冊 百舌鳥梅町遺跡 (MZU-5) 発掘調査概要報告』、大阪
- 堺市文化観光局文化財課 (発行年記載なし)『堺の文化財 百舌鳥古墳群』第 8 版、大阪
- 阪口英毅 2014『七観古墳の研究：1947 年・1952 年出土遺物の再検討』京都大学大学院文学研究科、京都
- 塩谷 修 2014『前方後円墳の築造と儀礼』同成社、東京
- 高橋克壽 2008「王権と埴輪生産」『埴輪群像の考古学』青木書店、東京：pp. 101-135
- 高橋克壽 2017「寄棟造家形埴輪の研究」『古代文化』第 69 巻第 2 号 公益財団法人古代学協会、京都：pp. 65-86
- 森 浩一 2003「平成 13 年度秋季特別展記念講演会録『失われた時を求めて―百舌鳥大塚山古墳の調査を回顧して―』」『堺市博物館報』第 22 号 堺市博物館、大阪：pp. 1-19

表 1 の遺跡文献

1. 堺市教育委員会 2016、2. 宮内庁書陵部 1995、3. 宮内庁書陵部 2013、4. 堺市教育委員会 2012、5. 堺市教育委員会 2018、6. 阪口英毅 2014、7. 森浩一 2003、8. 堺市教育委員会 2011、9. 堺市教育委員会 1994、10. 堺市教育委員会 2015、11. 堺市教育委員会 2011、12. 堺市教育委員会 1998、13. 宮内庁書陵部 2006、14. 『堺の文化財 百舌鳥古墳群』第 8 版、15. 堺市教育委員会 2018、16. 堺市教育委員会 1994、17. 堺市教育委員会 2019、18. 堺市教育委員会 1996、19. 堺市教育委員会 1973、20. 堺市教育委員会 1988、21. 堺市教育委員会 2009、22. 堺市教育委員会 1971、23. 堺市教育委員会 2020、24. 堺市教育委員会 1999、25. 堺市教育委員会 2011

挿図出典

- 図 1：1・2・4・6 報告書より再トレース、一部改変、3 堺市博物館提供、5 堺市文化財課提供
- 図 2：1・2 『堺の文化財 百舌鳥古墳群』第 8 版より転載・加筆、3 堺市博物館 2003 より転載・加筆